2023年度研修旅行 マレーシアコース 実践報告

原　　空留未（国　語　科）

1．はじめに

本校の研修旅行は、60期から5コース制となった。生徒たちは沖縄、奄美大島、東北、韓国、マレーシアの中から希望のコースに参加する。本稿では2023年度に実施したマレーシアコースについて報告する。

マレーシアコースは昨年度、先行実施を行っている。今年度はそれをベースにし、人数の都合によって行程に変更を加えた形である。

現地研修日程：2024年1月10日（水）～14日（日）
引率：原 空留未（国語科）・大塚　圭（外国語科）
　　町田 明弘（理　科）・石川 茂典（保健体育科）
参加生徒：71名（女子30名、男子41名）

2．事前学習

マレーシアは「多様性」の国である。主に英国による植民地支配を経験した歴史的経緯から、典型的な多民族国家を形成している。人種構成の内訳は、マレー系約70％（先住民12％を含む）、中華系約23％、インド系約7％であり、公用語はマレー語、英語、中国語、タミル語が使用される[1]。各民族は自分の

[1] 外務省(2024)「マレーシア一般事情」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/index.html閲覧日2024/2/2)

文化に誇りを持ちながらも、他の民族に対しても敬意を払って暮らしている[2]。

今回、生徒たちは事前にマレーシアについて調べ学習を行った。それらを踏まえ、自分たちなりの疑問を挙げ、問いを立てた。現地研修を通してその問いに対する答えが導けるよう、現地スケジュールを立て「探究アクション」を実行した。

事前学習は、土曜日の2時限目に設定されている「探究」の時間に行われる。今回研修リーダーが行った活動は以下の通りである。（※アカデミックプロジェクトの生徒は7月のパスポート説明会から合流した。）

4月　リーダーの顔合わせ/春休みに読んだマレーシア関係の本についての発表/事前学習のグループ分け/昨年度（先行実施）の動画視聴
5月　事前学習の動画作成/オンライン学習会の準備
6月　オンライン学習会/情報共有会の準備/情報共有会（アカデミック、リーダー合同）
7月　パスポート説明会
8月　夏休み個人探究課題の実施
9月　個人探究発表/B&Sのグループ分け/しおり作成スタート
10月　グループとしての探究課題を決定/調査方法を推敲
11月　B&Sの行程表作成/研修ノート作成/名刺作成
12月　研修ノート読み合わせ

マレーシアのオンライン学習会（6月）では、マレーシア政府観光局のマーケティングマネージャーである佐伯道子さんをお呼びした。45分の講義の中で、マレーシア建国までの歴史や宗教、各民族の違いや、現地研修をする上での注意点などを広く教えていただいた。

---

[2] マレーシア政府観光局(2020)『マレーシア修学旅行ハンドブック』p.6)

以下、生徒たちの感想を抜粋する。

・特に印象に残った話は、マレーシアでの教育は宗教や民族ごとに別れていないということです。私は民族や宗教がバラバラなままだと喧嘩や差別などの問題が起こるため、分かれていると思っていたけれど、そうではなくて混ざっているということが意外でした。
・民族によって食事や服装が違うのが大きな特徴だと思った。また、使用する言語で学校が分けられていることを知った。
・トイレの洗浄方法がトイレットペーパーではなくホースでの水洗いであることがびっくりした。また、日本ではスリは遠い話だけど、海外ではバックにチャックがついてないとスリが起こると言うことを知り、気をつけたいと思った。

ネットでは調べることが難しかった教育関係についての感想が多く見受けられた。海外旅行をしたことがない生徒もおり、日本と同じ基準で行動してはいけないことも勉強になったようである。

事前学習で最も力を入れたのは、グループとしての探究課題を決め、その調査方法を考えることである。大きな問いにならないように問いを絞り、高校生でも調査が可能なレベルにまで落とし込んだ。以下は生徒たちが立てた問いの一例である。

・日本で遊ぶのとマレーシアで遊ぶのはどっちが得かを考察するために、観光に必要な物価の違いを調査する。
・マレーシアで飲食店を開くために必要なことは何か、現地のお店にインタビューをする。

各グループの問いが出来上がり次第、現地調査が出来るようB&Sプログラ

ムの行程表を考えていく。単純に観光として行きたい箇所も入れ込み、オリジナルの行程表が出来上がった。旅行会社の担当の方を通し、現地の大学生に無理なスケジュールではないか、調査が実施できそうかなどの判断していただいた。全グループが事前にOKをもらうことができ、あとは当日を待つのみとなった。

3. 現地研修について

2024年1月10日（水）から14日（日）にかけて、マレーシアで現地研修を実施した。以下、その研修内容の報告である。

1日目　2024年1月10日（水）〈移動日〉

8時20分に羽田空港に集合し、約8時間半のフライトを経てマレーシアに到着した。入国審査に時間がかかり、夕食会場に着いた時には21時になっていた。マレーシア到着後、最初の食事は中華料理である。日本の味付けとは違う中華料理に、戸惑う生徒も見受けられた。ホテル到着は23時になり、1日目はすぐに就寝時間となった。

入国審査にて

夕食風景

2日目　2024年1月11日（木）／3日目　2024年1月12日（金）
〈ハラル産業開発公社・市内観光・バティック体験・B&Sプログラム〉

2日目、3日目はA班（35名）B班(36名)にそれぞれ分かれ活動をした。2班に分けた理由はハラル産業開発公社から一日の受け入れは40名以下にしてほしいとの要望を受けたためである。各班の主な行動は以下の通りである。

2日目　1月11日（木）

A班　9:00ハラル産業開発公社 →14:00マレーシア市内観光＆バティック体験
→18:00夕食（マレーシア料理「JOM MY SEAFOOD HOUSE」）

B班　9:00~17:00 B&Sプログラム→18:00夕食（インド料理「Passage Thru India」）

3日目　1月12日（金）

A班　9:00~17:00 B&Sプログラム→18:00夕食（インド料理「Passage Thru India」）

B班　9:00ハラル産業開発公社→14:00マレーシア市内観光＆バティック体験
→18:00夕食（マレーシア料理「JOM MY SEAFOOD HOUSE」）

両班とも午後の活動が終了次第、それぞれバスで夕食会場へ向かった。夕食後はホテルの部屋に戻り、研修ノートを書き、22時30分の点呼の際に提出して就寝、という流れである。以下、「ハラル産業開発公社」「マレーシア市内観光＆バティック体験」「Ｂ＆Ｓプログラム」についての詳細である。

【ハラル産業開発公社】

ハラル産業開発公社は通称HDC（Halal Development Corporation Berhad）と呼ばれ、世界初の政府支援によるハラル産業開発法人である。生徒たちは本社に行き、ハラルについての講習を受けた。ハラルとハラムの違い、

ハラル認証を取るために必要なことなど、専門的な内容を学んだ。3時間半に及ぶ講習の最後にはクイズ大会が行われ、上位入賞者には商品が送られた。その後、現地のスタッフを交えてのインタビューをおこなった。5人に対し一人のスタッフがついてくれたため、講義の中で疑問に思ったことをたくさん質問することができた。研修の最後には一人ひとりに認定証（マレーシアHDC本社において「HALAL INDUSTRY　FUNDAMENTALS」を終了した証明）が発行された。

昼食はHDC内でマレー料理をいただいた。見た目では味が想像できない料理も多く、生徒たちは食べるごとに驚きがあったようである。

インタビューの様子

B班ハラル産業開発公社集合写真

【マレーシア市内観光＆バティック体験】

午後はバスで王宮（ISTANA NEGARA）に向かった。王宮内は入ることができなかったため、門の前で集合写真を撮った。門の両側には騎馬衛兵がおり、生徒たちはその前でも写真を撮っていた。滞在時間は計20分ほどである。

その後、再びバス移動をし、バティック体験ができる施設にむかった。バティック（Batik）とは東南アジア地域で発展した伝統的な染物技法のことだ。布地にろうを使って図案を書き、その後染料を使用し染めるという手法を用いる。

店舗につき、すぐにバティック体験の流れを説明してもらった。生徒たちはろうで線を引くやり方を教わってから、花の図案が下書きされている20㎝×20㎝の布地を選んだ。下書きに沿ってろうを垂らしていくのだが、スタッフ

のようにするするとは書けなかった。高温のろうが溶けているうちに素早く作業を行わなければならず、また細くなりすぎても途切れてしまってもいけないため、苦戦していた。スタッフの方に手伝っていただきながら、どうにか図案の本書きを完成させた。色付けに関しては、最初にグラデーションのやり方や染料の混ぜ方などを学び、各々が自身の表現したい色を作っていった。

色付け後は、店舗内にある土産物屋をみた。バティック染めで作られた洋服やぬいぐるみなども売られており、生徒たちは思い思いに買い物をした。（色付けした作品は店舗に預け、当日は終了である。翌日、完成した作品がホテルに届けられた。）

A班　王宮集合写真

バティック体験 色付けの様子

【Ｂ＆Ｓプログラム】

B&Sとはブラザー＆シスタープログラムの略で、班別行動の際に現地学生と日本の生徒がチームを作って行動するプログラムである。今回は本校の生徒4人に対し、現地学生が2人ついてくださるという贅沢な体験となった。

朝9時、ホテルで現地学生と待ち合わせを行い、班ごとにマッチングを行う。生徒たちは初めましての大学生に対し、緊張しながらも自己紹介をしていた。事前にこちらが希望する調査場所や観光地はスケジュールとしてまとめて渡しているため、スムーズに出発することができた。以下、一日のスケジュール例を挙げる。

時間	訪問先・移動	活動内容
9:00	ホテル着	B&Sの大学生にアンケート
	電車移動	
9:30	マスジット・ジャメ駅	写真撮影・観光
	ムルデカ広場	観光・アンケート調査
	KL・ギャラリー	観光
	セントラルマーケット	お土産購入
12:00	チャイナタウン	お土産購入
13:00	アロー通り	昼食
	電車移動	
15:00	ツインタワー	観光・ショッピング
	電車移動	
16:45	ホテル着	

上記の班は、現地の方にアンケートをとることを探究アクションとしていた。日本とマレーシアの食文化の調査をし、マレーシアと日本それぞれ30人ずつのインタビューを実施した。今回の研修で大事なのは、現地で何かコミュニケーションを取る活動を行うことである。探究活動であるため、問いの質や答えに向かっての論理は当然大事であるが、全員がそのような探究アクションを行うこと自体も一つの目標としていた。調査方法は、インタビュー形式が最も多く、ホワイトボードを用いて質問をしたり、ボードにシールを貼ってもらったりする班もあった。ホテルに帰ってきた生徒たちからは、英語で会話が出来た、外国人である私たちにも優しくしてくれて嬉しかったなど、プラスの感想が多く聞こえた。最初は緊張していた生徒たちも、お別れの際には現地大学生と抱き合い、SNSを交換している様子が見られた。

探究アクションの合間には、ショッピングを楽しんだり、ヘナタトゥー体験（「ヘナ」という植物の葉のペーストを使って描くボディーアート）をしたり、人気のカフェに行ったりと、マレーシアの街を楽しんでいた。今回人気の訪問先はツインタワー、KLタワー、セントラルマーケット、チャイナタウンであった。

アンケート結果の様子

B&S 現地大学生との集合写真

CL「すき家」にてインタビュー

ヘナタトゥー体験

4日目　2024年1月13日（土）

〈カンポンビジット・ベリーズチョコレート工場・プトラモスク〉

4日目の午前中はカンポンビジットを行った。カンポンとは、マレー語で「田舎」「村」という意味である。一般家庭にホームステイをし、日常の暮らしを体験できるプログラムだ。カンポンに着いて最初に行ったのはパーム油に関わる農業体験である。パーム油のアブラヤシから果房を落とすところを間近で見学した。果房は地上から20メートルほどの高さにあるため、長い鎌を使って果房周囲の葉っぱを切り落とすところから始まる。その後、果房を落とし、中の果実を割る。その中から滲み出る油を触らせてもらった。アブラヤシの後に見せてもらったのはゴムの樹だ。生徒たちはゴムの樹に斜めの切り傷を入れ

る作業を体験した。その傷からゴムの樹液が流れ、幹に設置された採取カップに樹液を溜めた。ゴムの樹液を直接触るのは皆初めてだった。

アブラヤシ見学

ゴムの樹液採取

全体での農業体験の後は、各家庭でのホームステイである。1家庭に、中杉生5人で伺う形をとった。生徒たちは石を用いたゲームをしたり、子どもたちと遊んだりしていた。他にも、折り紙を持っていって鶴を折ったり、マジックを披露したりした班もあった。お昼はホストマザーの手作りの料理をいただいた。カレーや卵焼き、フルーツなどが出た家庭が多く、生徒たちは大満足だったようである。生徒たちの感想は以下のとおりである。

・実際に現地で暮らしている人の家に行き、日本との文化の違いを実感できたり、他国の人と話すことが楽しかった。ホストファミリーが日本に興味を持ってたくさん質問をしてくれたのが嬉しかった。

・カンポンのお昼はマレーシアで食べた料理の中で一番美味しかった。手で食べるんだよと言われたのでチャレンジしてみた。最初は抵抗があったけれど、意外と食べられることに驚いた。

・班のメンバーがマジックを披露していた。成功したときはとても盛り上がってくれ、失敗したときにはホストファミリーも大笑いしていて、とても楽しい時間が過ごせた。

・マレーシアでした体験の中で一番面白かった。「ここはあなたの家よ、いつでも帰ってきてね」と言われ最後のお別れは本当に寂しかった。

このような濃い時間を過ごすことができたのは、生徒一人ひとりが積極的にコミュニケーションをとった結果であると思う。生徒たちの頑張りがよく見えるプログラムであった。

カンポンでの伝統衣装体験

カンポン家庭での様子

次に向かったのはベリーズチョコレートの工場である。ベリーズはマレーシア国内で製造されているチョコレートだ。当初の予定では、工場見学40分、お土産購入20分の計1時間の滞在予定であった。しかし到着してみると施設内は大混雑で、入場までに30分以上かかるといわれてしまった。私たちの前に来ていた団体が予約時間に間に合わず、遅れているのが原因とのことである。4日目は夜の飛行機の時間があるため、ここで長い時間待機をすることはできなかった。最終的に、工場見学を無くしお土産購入の時間だけをとった。

最後の目的地は、行政都市であるプトラジャヤに位置する、イスラム教の礼拝堂プトラモスク(Masjid Putra)である。建物には花崗岩を使用しており、ふんわりとしたピンク色の見た目から通称ピンクモスクと言われている。宗教上の理由から肌の露出が禁止とされており、体のラインが出る服も好ましくない。女子生徒たちは全員が入り口のレンタル所でフードつきのローブを借りた。ちょ

うど礼拝の場ではお祈りが始まり、生徒たちは後方から静かに見学をした。ドーム状の高い天井やアラベスク模様の内装もすべてがピンク色で、言葉を失うほどの美しさであった。その後は、モスク内でぼうっと過ごしたり、ボランティアの方々とお話をしたり、隣のプトラジャヤ湖を見に行ったりと、集合時間まで様々な過ごし方をしていた。

プトラモスクの見学後は、夕食会場へと向かった。レイクビューのPUTRA JYAYA SEA FOODというお店である。研修旅行最後のご飯はマレーシア料理であった。夕食後はバスでクアラルンプール空港まで移動、時間通りのチェックインができ、無事に機内搭乗を済ませた。22時50分発の飛行機でマレーシアを後にした。

プトラモスク外観

モスク内にて

5日目　2024年1月14日（日）〈移動日〉

7時に羽田着、71人全員が入国審査を済ませた。3泊5日の研修旅行は、大きな怪我もなく終了した。

4. 本研修を通じての生徒の感想

研修を通しての生徒の感想の一部を紹介する。

・英語はツールでしかなく、拙い英語でもどうにかなるんだと海外へ行く自信がついた。

・ハラルの細さに驚いた。一概にハラルだからこれとこれだけダメねって決めつけずに聞かないと分からないこともある。

・Ｂ＆Ｓで、マレーシアの人たちに「普段どんな料理を食べているか」アンケートをとって、たくさんの人とコミュニケーションをとることができ、マレーシアの人の優しさを肌で感じることができ印象に残った。また、コンビニやスターバックスなどの店内の様子を日本とマレーシアでの違いを比較することができて面白かった。

・現地の大学生とコミュニケーション取りながら、現地の方と行動したから回れた市内観光が楽しかった。現地の電車と道が複雑すぎて中杉生だけだったらかなり苦労したと思った。海外の方ともお話出来るという自信がついた。

・ハラルについて、あまり学校でも学んだことがなかったし、実際にイスラームの人の話を聞くことができたため、詳しくハラルについて知ることが出来た。また、グループごとに質問をすることが出来たため、自分が知りたいことをたくさん質問することが出来て、深い学びを得ることができたと思う。

・マレーシアでは、文化や暮らし、宗教観など多くの面で日本との違いがあることを改めて実感しました。特に、トイレは事前の知識があっても実際に行ったときに戸惑うことが多かったです。流すボタンがどこにあるか分からなかったり、間違えてウォシュレットになって止められなかったりとハプニングが続出でした。日本では、床がきれいで、トイレットペーパーが常備されているのが基本だと思っていたけれど、国によって全く異なる

のだと改めて思いました。また、マレーシアは車社会で歩行者用の信号が青になる頻度が少なく、すぐに赤になってしまいます。そのため、赤信号でも車がいなければ渡ってしまうことが多くあるそうです。国によって道路事情も異なるので、マレーシアの人が日本を訪れたときに、もしマレーシアにいるときの感覚で赤信号を渡ってしまったらとても危険だと思いました。しかし、そういった理由による事故も少なくはないと考えられるので、事前に防ぐため具体的な対策が必要だと考えました。

・日本語が通じなくても、積極的に話すことが大事。話せば、なんとなく通じるし仲良くなれる。日本でも言語が通じるからこそなおさら、積極的に話してみることが大事なのかなと思った。

・マレーシアは行ったことがなく、あまり興味が無い国だったけれど、色々な便利なことや不便なことを知ってマレーシアについて少し詳しくなった。イスラームはあまり関わったことがなく断食や崇拝をしているということだけ聞いていたため、辛そうな宗教だなと以前まで思っていたけれど、ハラル産業で実際にイスラームの人のお話を聞いて、辛そうに話していなかったし、イスラームの良さにも気づけたので、イスラームに対しての考えやイメージが変わった。

5. 振り返り

行程上の反省としては、日々の飲み水の確保、全体を通してのスケジュールのハードさが挙げられる。いたるところに自動販売機がある日本とは違い、気軽に飲み水を買うことができない。そのため、毎日どこか飲み水を購入する時間を取らなければならなかった。ホテルでは毎日1本水が支給されるが、それを2本にすることや、夕食会場でペットボトルの水をつけるなどの対応を考えていく必要がある。また、スケジュールに関しても、何点か見直しが求められた。マレーシアは飛行機が長いため、現地で行動できるのは実質3日間であり、そこに多くの予定を詰め込む。特に4日目は７時30分にホテルを出発してから、

飛行機搭乗まで15時間以上である。カンポン、ベリーズ、モスク、夕食会場、空港と移動も多く、生徒たちはクタクタであった。プログラムの削減や変更等、来年度の担当者とともに考えていきたい。

反省点は多々あるものの、昨年の先行実施の甲斐もあり、とても充実した研修を行うことができた。全体的にハードスケジュールだったため、生徒の体力面を危惧したが、最後までやり切ってくれて安心している。マレーシアでしかできない体験をする、探究アクションを行う、積極的にコミュニケーションを取るなどの目標は全員が達成でき、事後学習においても、それぞれが現地で得たデータを存分に生かしたまとめを行っていた。マレーシアコースのテーマであった多様性についても、生徒たちは「ただそこに互いが『いる』という感じで、民族同士意識しているような感覚はなかった。」「多様性が当たり前すぎて、日本人の私たちも馴染んでいた気がする。」といったような感想を述べていた。現地でしか得られないものがたくさんあったようで、コース担当者としてはたいへん嬉しく思っている。今後の探究活動にも本研修を活かしてくれたらと期待している。

【参考文献】

○外務省(2024)「マレーシア一般事情」
https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/index.html
○マレーシア政府観光局(2020)『マレーシア修学旅行ハンドブック』